

褐色肌のイスラム少女の死がなぜ大問題になるのか？

トロントライフ マガジン 11月号、Mary Rogan 氏による記事“阻止された少女：Aqsa Parvez の短い人生”は、トロント在住の16歳の少女が父親との口論の末家出をするが、実家に呼び戻され殺害、父親と少女の実兄が殺人の罪で起訴されるという事件を取り上げた。

トロントライフの記事は、事件の発端が少女のライフスタイル選択についての意見の相違であったため、この殺人を“名誉を守るための殺人”と特徴づけた。

この記事は予想通り、日頃よりディベートの適正を注意深く見守る者たちの批判的となっている。多文化主義を掲げる狭量な熱狂論者は、この記事がイスラム教徒を批判していると訴えたが、その理由は意外なことに、この記事がイスラム少女らに対する暴力を大きく取り上げたためであった。

皮肉なことに、この事件を公にしないよう働きかけている独断主義者らはフェミニストを名乗っているのだが、彼らの提唱する“フェミニスト”というのは、一風変わったフェミニスト、つまり根本的には女性に対する暴力を非難するのだが一方でイスラム教徒の女性への暴力を公にしようとする人々の口封じをしているのである。

このダブルスタンダード（二重基準）は残念なことではあるが驚くべきことではないのかもしれない。歴史を振り返ると、時間の経過につれ、当初の起源とは相反する方針をとるようになる社会運動の例が多いのである。褐色肌のイスラム少女の“名誉の殺人”について騒ぎ立てるべきではないというフェミニストの議論はダブルスタンダードなのである。しかし事実、この議論を支持するものたちは革新的な美辞麗句を並べるが、その実態は差別主義者あるいは女性嫌悪論者となんらかわりはないのである。

最も嘆かわしいのは、多文化主義の中核にいる者たちは自分らが庇護していると主張しているその人々を裏切っているという点である。イスラムコミュニティの中の革新主義者のグループと個人は原理主義に反対し、女性の権利を向上すべく一生懸命活動している。その一方で、多文化主義者らは、その同じコミュニティの中で最も改革に反対する指導者や変革に抵抗する機関と手を結ぼうと忙しく活動しているのである。以前は家父長制・男性支配の権力構造から抑圧された人々や弱者を守る立場にいた社会運動の指導者らは、今では逆側につき、権力構造を守る立場をとっている。これが問題の種となっている。

Ulli Diemer 文/英語原文

Motoka Westenfeld/ 訳